The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宮津市方言における連母音融合の特徴
Author(s)	小田, 佐智子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2016, 14, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55615
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 14 号（2016 年 3 月）1-11

宮津市方言における連母音融合の特徴

小田　佐智子

【キーワード】宮津市方言、連母音融合

【要旨】

本稿は、2014、2015 年度に京都府宮津市において実施した方言調査のうち、連母音に見られる融合現象について報告するものである。調査地点は宮津市中心部の宮津地区と、宮津市の北部に位置する日置地区の 2 地点で行った。調査で得られた結果から、宮津市方言の連母音融合の特徴については以下のようにまとめられる。

（A）連母音の融合現象は、宮津地区では認められず、日置地区のみに認められる現象である。宮津地区の意識調査から、連母音の融合形はすでに衰退したと考えられ、宮津地区と日置地区とでは大きく異なる。

（B）/ai/連母音は、基本的に口蓋化する[ja:]の融合形、/ui/連母音は[i:]となり、/oi/連母音は[e:]となり、/ae/連母音は、/ai/連母音と同様に[ja:] で実現される。

（C）2 モーラの語はほとんど融合しない。これは、2 モーラの語の安定性を保つためであると考えられる。

（D）連母音融合は形容詞に多く表れる傾向がある。これは、形容詞がその性質上/ai/、/ui/、/oi/の連母音を含む場合が多いからであると考えられる。

1.　はじめに

本稿は、京都府宮津市において 2014、2015 年度にかけて実施した方言調査の中から、語音韻的特徴の調査結果を報告するものである。室山（1967）や奥村（1962）では、京都府宮津市やその周辺の音韻的特徴の一つに、連母音の融合現象が挙げられている。しかし、この連母音融合現象は、宮津市以北の地域で特に顕著にみられる音韻的特徴であると述べられているが、宮津市内では、宮津湾を挟んで北側と南側の地域では、方言区画が異なり、連母音の融合の有無についても大きな差が認められそうである。この宮津市内における音韻的バリエーションについて言及している先行研究は管見の限り見当たらない。また、全国的にみても、地域方言に見られる連母音融合現象は、消滅、または単純な融合音へ統合していくという流れが認められていることから、2015 年度段階で、宮津市内にどの程度、連母音融合現象が認められるかという観点から調査を行った。

本稿の構成は以下の通りである。まず、§2 では、宮津市周辺における連母音融合の特徴を述べる。§3 では、調査概要を述べる。具体的には、調査項目とその目的について確認し、宮津地区、日置地区のインフォーマント情報を述べる。§4 で調査結果を示し、宮津地区、日置地区の音韻的特徴について述べる。そして§5 では結果の考察を行い、§6 を本稿のまとめとする。

2.　宮津市周辺における連母音融合の特徴

宮津市以北は、連母音融合が盛んにおこなわれる地域であり、いわゆる「非近畿的な音声事象（室山 1967）」がみられる地域であると言われている。「連母音融合が盛ん」と言われる地域は宮津湾を挟み、北と南で異なっており、奥村（1962）による京都府の方言区画をみると、調査を行った宮津地区と日置地区は異なる方言区画に属する。奥村の方言区画では、宮津地区は宮津市南部と舞鶴市、宮津市南部に位置する大江町の一部を含む地域と同じ方言区画に属し、日置地区は伊根町や現京丹後市と同じ方言域に属している。そこでまず、両地区における連母音融合の特徴について概観する。

図 1　調査地区と宮津市周辺地図

宮津地区は、/ai/ は[ja:] [e:]に変化することはあるが[æ:]になることはほとんどない（奥村 1962:90）。対して日置地区の方言区画では、/ai/が[ja:][e:]、そして[æ:]で実現されることが多い。さらに日置地区では/ai/連母音だけではなく、/ui/→[i:] 、/oi/→[e:]と融合するといわれているが、宮津地区ではそのような記述はない。日置地区と同じ方言区画にある伊根町の音韻的特徴について記述した室山（1967）では、「/ai/、/oi/、/ae/、/ui/などの同化現象も、かなりさかんである（室山 1967:163）」と述べている。特に/ai/が最も多様な音変化を見せ、[ja:]、[æ:]、[e:]の融合パターンが認められる。/oi/と/ae/の連母音は[e:]となり、/ui/は[i:]で実現される。丹後地域における連母音の融合現象は、糸井（2015）の調査報告でも、特に/ai/、/ei/、/ui/、/oi/で観察されるとされており、宮津市以北の地域では、連母音の融合が強く残っていることがわかる。日置地区が伊根町や丹後地域と同じ方言区画に属しているのであれば、室山（1967）、糸井（2015）が指摘する連母音融合と同じ現特徴が観察されると考えられる。

先行研究から、宮津地区、日置地区における連母音の融合の有無、実現形をまとめると表 1 のように表される。

表 1　先行研究による宮津・日置地区の連母音融合の有無

	/ai/	/ui/	/oi/	/ae/
宮津地区	[ja:]、[e:]	×	×	[e:]
日置地区	[ja:]、[e:]、[æ:]	[i:]	[e:]	[e:]

3.　調査概要

本節では、調査の概要について述べる。まず、§3.1 で調査を行なったインフォーマント情報について、§3.2 では調査で用いた調査文について述べる。

3.1.　インフォーマント情報

調査は、宮津地区と日置地区で調査票を用いた面接調査を行なった。インフォーマントはいずれも言語形成期を宮津地区、日置地区で過ごし、現在も同地域に居住する 70 代から 80 代の宮津市方言話者である。調査を行なったインフォーマントの情報は以下、宮津地区を表 2 に、日置地区を表 3 にまとめた。

表 2　宮津地区のインフォーマント情報

ID	年齢	外住歴
MBM	84	18-22:京都市上京区
MNF	82	なし
MCF	81	26-28:恵美須町
MEM	79	なし
MFM	73	42-45:福井県小浜市、45-51:京都府亀岡市
MGF	73	なし

表 3　日置地区のインフォーマント情報

ID	年齢	外住歴
HGF	84	なし
HCM	83	なし
HHF	80	なし
HIF	79	0-18:宮津市字養老、18-現在:宮津市字日置
HEM	73	なし
HJF	73	18-21:京都市
HFM	70	18-19:京都府綾部市

3.2.　調査方法

連母音融合の調査では、インフォーマントと調査者の二者による面接調査及び意識調査を行った。面接調査では、調査者が調査項目を読み上げ、インフォーマントが日常において言い慣れた最も自然な形で再生してもらう方法をとった。あわせて、いくつかの音のバリエーションを用意し、「このような言い方はするか」、「このような音で再生された場合の印象はどうか」など、連母音の融合形または非融合形に対する意識を尋ねるという意識調査も併せて行った。/ai/、/ui/、/oi/、/ae/の調査項目は以下の表 4 の通りである。

表 4　調査語彙

連母音	
/ai/	・貝　・鯛　・無い　・うまい　・炊いて　・芝居・入る　・辛い　・狭い　・若い　・書いた　・偉い　・太鼓　・兄弟　・商売　・この間　・会社　・大根　・階段・危ない・台所　・三回　・汚い　・冷たい・平たい
/ui/	・杭　・悪い　・古い　・脱いだ　・安い　・薄い　・軽い　・着いたら・すすいだ　・歩いて
/oi/	・甥　・来い　・重い　・ひどい　・落とした（イ音便化）　・面白い　・驚いた　・ものすごい　・届いた
/ae/	・苗　・蠅　・前　・お前　・帰る　・考える　・裏返し　・前掛け　・ひきがえる

4.　調査結果

本節では、調査結果についてみていく。§4.1 で/ai/連母音に関する結果を、§4.2 で/ui/連母音に関する結果を、§4.3 で/oi/連母音に関する結果を、§4.4 で/ae/連母音に関する結果についてみていく。

なお、小節における結果をまとめた表は、回答で連母音融合が多くみられたものを上に示しており、調査順ではない。また、表内のセルが二段になっているものは、上段の①が第一回答、下段の②が自発的に出てきた第二回答である。

4.1　/ai/連母音

表 5 は、/ai/連母音の調査結果をまとめたものである。

表 5　/ai/連母音の調査結果

	宮津地区						日置地区						
項目	MBM	MCF	MEM	MFM	MGF	MNF	HCM	HJF	HGF	HIF	HHF	HFM	HEM
商売	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●	○	○
偉い	○	○	○	○	○	○	●	●	▲	▲	①○ ②●	○	○
汚い	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	①○ ②●	○	○
うまい	○	○	○	○	○	○	●	①● ②○	●	●	①○ ②●	○	○
兄弟	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	○	○	○
高い	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	○	○	○
長い	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	○	○	○
平たい	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	○	○	○
大根	○	○	○	○	○	○	●	①○ ②●	●	●	○	○	○
三回	○	○	○	○	○	○	●	●	●	○	○	○	○
太鼓	○	○	○	○	○	○	●	●	●	○	○	○	○
つらい	○	○	○	○	○	○	●	●	●	○	○	○	○
ない	○	○	○	○	○	○	●	●	●	○	○	○	○
入る	○	○	○	○	○	○	●	●	●	○	○	○	○
辛い	○	○	○	○	○	○	●	●	○	●	○	○	○
狭い	○	○	○	○	○	○	●	●	○	▲	①○ ②●	○	○
危ない	○	○	○	○	○	○	●	●	○	●	①○ ②●	○	○
芝居	○	○	○	○	○	○	●	①○ ②●	●	○	○	○	○
炊いて	○	○	○	○	○	○	●	①○ ②●	●	○	○	○	○
この間	○	○	○	○	○	○	●	○	●	○	○	○	○
会社	○	○	○	○	○	○	●	○	●	○	○	○	○
鯛	○	○	○	○	○	○	●	○	●	○	○	○	○
若い	○	○	○	○	○	○	●	●	○	○	○	○	○
書いた	○	○	○	○	○	○	●	●	○	○	○	○	○
貝	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○
階段	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○
台所	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○

凡例：○：融合形なし、●：融合形[ja:]で実現、▲：融合形[e:]で実現

表 5 を見ると、宮津地区と日置地区とでは明確な差が認められる。宮津地区では、連母音融合が 1 例も認められないのに対し、日置地区では、インフォーマントによって個人差

があるものの、連母音融合が盛んであることがわかる。あわせて行った意識調査では、宮津地区の院のフォーマンとのほとんどが連母音融合形について「昔の人が話していた」「今は使わないし耳にもしない」と回答していることから、宮津地区における連母音の融合現象は衰退し、/ai/の母音連鎖音に一本化しているといえる。

一方、日置地区では、盛んに/ai/連母音は融合し、実現されることが明らかになった。特に HCM はすべての項目において連母音の融合化し、/ai/は必ず[ja:]となる。同じく HJF、HHF でも/ai/連母音の融合形が[ja:]となり、[e:]や[æ:]で実現される例は認められなかった。HGF、HIF では[ere:]や[seme:]のように、/ai/ が[e:]に融合する例が認められるが、この 2 項目のみであり、そのほとんどが[ja:]で実現されている。このことから、日置地区における/ai/連母音の融合形は[ja:]が基本であることがわかる。

4.2　/ui/連母音

表 6 は、/ui/連母音の調査結果をまとめたものである。

表 6　/ui/連母音の調査結果

	宮津地区						日置地区						
項目	MBM	MCF	MEM	MFM	MGF	MNF	HCM	HJF	HIF	HGF	HHF	HFM	HEM
悪い	○	○	○	○	○	○	■	■	■	■	○	○	○
古い	○	○	○	○	○	○	■	■	■	○	○	○	○
薄い	○	○	○	○	○	○	■	■	■	○	○	○	○
軽い	○	○	○	○	○	○	■	■	○	○	○	○	○
歩いて	○	○	○	○	○	○	■	■	○	○	○	○	○
脱いだ	○	○	○	○	○	○	■	○	○	○	○	○	○
安い	○	○	○	○	○	○	■	○	○	○	○	○	○
着いたら	○	○	○	○	○	○	■	○	○	○	○	○	○
すすいだ	○	○	○	○	○	○	■	NR	○	○	○	○	○
杭	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
凡例：○ ：融合形なし、■ ：融合形[i:]で実現、NR：未回答													

/ui/連母音では、§4.1 と同様、宮津地区に融合形の回答は認められなかった。それに対して日置地区を見ると、HCM、HJF、HIF、HGF の 4 名に融合形が認められ、/ui/連母音の融合形は共通して[i:]となることが明らかになった。これは奥村（1962）の指摘と同様の傾向である。また、2 モーラである「杭」は融合せず、[kui]で実現されることも指摘できる。

4.3　/oi/連母音

表 7 は、/oi/連母音の調査結果をまとめたものである。

表 7　/oi/連母音の調査結果

	宮津地区						日置地区						
項目	MBM	MCF	MEM	MFM	MGF	MNF	HCM	HGF	HJF	HIF	HHF	HFM	HEM
重い	○	○	○	○	○	○	●	●	●	○	○	○	○
落とした	○	○	○	○	○	○	▲	▲	▲	○	○	○	○
おもしろい	○	○	○	○	○	○	▲	▲	▲	○	○	○	○
ひどい	○	○	○	○	○	○	▲	▲	▲	○	○	○	○
ものすごい	○	○	○	○	○	○	▲	▲	NR	○	○	○	○
届いた	○	○	○	○	○	○	▲	▲	NR	○	○	○	○
驚いた	○	○	○	○	○	○	▲	▲	NR	○	○	○	○
甥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
来い	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
凡例：○ ：融合形なし、● ：融合形[ja:]で実現、▲ ：融合形[e:]で実現、NR ：未回答													

/oi/連母音でも宮津地区では融合形の回答が認められず、日置地区では HCM、HGF、HJF に[e:]となる回答が認められた。「重い」に関しては、HCM、HGF、HJF の 3 名で[omoi]ではなく、[omotai]が採用され、/ai/連母音の融合形が出ている。これについては連母音の問題ではなく、語彙の問題であるため、/oi/連母音の議論の対象から外れるものである。同じく HCM、HGF、HJF では「落とした」では「ɕi」がイ音便化し、[otoita]となって表れた/oi/が融合化し、[ote:ta]となっている。「落とした」はサ行イ音便化した[otoita]の/oi/母音連鎖の回答はなく、必ず融合化した[ote:ta]となることも指摘できる。

また、「甥」「来い」の 2 モーラの項目では、融合することはない。[koi]については 2014 年度に行った名詞の「鯉」で調査を行った場合でも融合形の回答は得られなかったことから、項目の品詞性は関係しないと考える。

4.4　/ae/連母音

表 8 は、/ae/連母音の調査結果をまとめたものである。

表 8　/ae/連母音の調査結果

	宮津地区						日置地区						
項目	MBM	MCF	MEM	MFM	MGF	MNF	HCM	HJF	HGF	HFM	HHF	HIF	HEM
お前	○	○	○	○	○	○	●	●	●	○	① ○ ② ●	○	○
前掛け	○	○	○	○	○	○	●	●	○	●	○	○	○
蠅	○	○	○	○	○	○	●	●	○	○	○	○	○
ひきがえる	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○	○	○	○
裏返し	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○
帰る	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
考える	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
苗	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
前	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
凡例：○ ：融合形なし、● ：融合形[ja:]で実現、▲ ：融合形[e:]で実現													

/ae/連母音でも宮津地区には融合形の回答が認められず、日置地区のみに回答があった。/ae/連母音は融合し、/ai/連母音と同じく[ja:]に変化する。先行研究では、/ae/連母音は[e:]に変化すると指摘されているが、今回の調査結果とは一致しなかった。連母音/ai/と/ae/の融合形に[ja:]が表れるということは、/ai/と/ae/が近い存在であることを示していると考えら

れる。

/ae/連母音で融合形の回答が得られなかった項目は、「帰る」「考える」「苗」「前」の 4 項目である。「前」は融合しないものの、同じ音を含む「お前」は[omʲa:]となることから、モーラ数が連母音融合の変化要因になりうると考えられる。ただ、同じく 2 モーラである「蠅」は HCM、HJF で[hʲa:]と回答されている。HGF の回答を見ると、「蠅」は[hai]と答えており、/ai/連母音となる。この変化を踏まえ§4.1 の/ai/連母音を見ると、/ai/連母音ではモーラ数に関わらず融合する傾向にある（e.g.鯛→[tʲa:]、貝→[kʲa:]）。このことから「蠅」については/ae/連母音を含む[hae]から変化したのではなく、/ai/連母音の[hai]から [hʲa:]に音変化したプロセスが考えられる。

4.5　調査結果のまとめ

以上、調査結果をそれぞれの連母音別に見ていった。調査結果から以下の点が明らかになった。

（a）連母音の融合現象は、宮津地区では認められず、日置地区のみに認められる現象である。

(a-1) 宮津地区では、調査回答に連母音融合形の回答がなく、インタビューでも、「昔は使っていたかもしれないが今は言わない」「そんな言い方は聞いたことがない」という回答が最も多かったことから、宮津地区における連母音融合現象は、連母音に関わらず衰退したと言える。

(a-2) 日置地区では、個人差があるものの連母音の融合が宮津地区に比べ、多く認められる。特に/ai/連母音で特に連母音融合が盛んである。奥村（1962）では、/ai/連母音に対して[ja:]、[e:]、[æ:]のバリエーションがあると述べられているが、今回の調査では、基本的に口蓋化する[ja:]の融合形をとる。このことから、/ai/連母音は[ja:]にほぼ一本化しているのではないかと考えられる。

（b）/ai/連母音は、基本的に口蓋化する[ja:]の融合形をとる。「偉い」「狭い」では[ja:] ではなく、[e:]をとり[ere:]、[seme:]になる場合もあるが、インフォーマントによって個人差がある。

・/ui/連母音は、融合し、[i:]で実現される。

・/oi/連母音は、融合し、[e:] で実現される。

・/ae/連母音は、融合し、[ja:] で実現される。

・/ui/、/oi/、/ae/連母音では、融合するのは 3 モーラ以上の語彙に限られており、

（c）2 モーラの語彙は融合しにくく、/ai/連母音にのみ融合形が認められる。

それ以外の連母音では、融合せず、母音連鎖で実現される。

以上の結果から、宮津市方言における連母音の融合現象は、日置地区に見られる特徴であることが確認できた。室山（1967）やインフォーマントの意識調査の結果を踏まえると、宮津地区の連母音の融合現象は、日置地区よりも早く衰退したと考えられる。日置地区でも回答に個人差があり、また項目によっては高い割合で融合するものと、融合せず標準語と同じく母音連鎖で実現されるものがある。項目における融合の差は、何に起因するもの

であろうか。次節では、連母音融合の要因について考察していく。

5.　考察

本節では、調査結果の考察を行う。具体的には§5.1 で、調査項目のモーラ数と連母音融合の関係について、§5.2 で、調査項目の品詞のタイプから考察する。この 2 つの観点から考察する理由は、いくつかの方言にみられる連母音融合が起こりうる要因に、モーラ数との関係（安藤 2013）や、品詞のタイプ（吉田 1992、内山 1993、尾崎 2013）が認められているからである。

5.1　モーラ数

連母音融合の融合、非融合について、モーラの観点から考察する。まず、調査項目で 2 モーラの項目は、「貝」「鯛」「鯉」「来い」「杭」「甥」「苗」「前」「蠅」であり、そのうち、「貝」「鯛」では HCM、HGF で融合形が認められたのみで、それ以外の項目では、融合形の回答は得られなかった。/ai/連母音は、特に融合形の出現が多い連母音であり、他の連母音に比べると連母音の融合現象が強く残り続けていると言える。最も連母音の融合現象が盛んにみられる/ai/連母音の中でも、「貝」「鯛」の融合形の回答は非常に少なかった。また/ui/、/oi/連母音でも、唯一連母音の融合形が実現されなかったのは「杭」「鯉」「来い」の 2 モーラの項目である。それに対して、融合形の回答が多い項目は 2 モーラ以上の「商売」や「偉い」「重い」「悪い」などであることがわかる。また、/ae/連母音を見ると、2 モーラの「前」だけでは融合形は認められないものの、同じ音構造を持つ「お前」や「前掛け」になると、融合形が出現するようになる。

宮津市方言における連母音融合には、[eɾʲa:]のように先立つ子音を口蓋化させ、空白となった一拍を補うために長音化するタイプと、[waɾi:]のように口蓋化はせず、長音化するタイプが認められる。いずれのタイプも融合において空白になった一拍を補うために長音化するという共通の特徴が挙げられる。長音のような特殊モーラは、それ自体単独で音節を構成することができない自立性が低いものである。それに対して、直音は自立モーラと呼ばれ、文字通り自立性が高く、1 つの音節を担っている。韻律単位としてモーラとして自立できるか否かは、音節構造の安定性の問題にかかわってくる。特殊モーラは、自立性が低いものほど音節として処理するのが難しくなり、語の安定性も低くなる。この点から考えると、連母音を融合させるということは、安定性が高いものから低いものへと音韻変化するとも言えるだろう。2 モーラの項目の場合、モーラ数が少ないため、連母音融合が生じた場合、3 モーラや 4 モーラといった語に比べ、語の安定性が低くなってしまう。このことから、語の安定性を確保するために、2 モーラの語は、自立性が高い非融合形を採用する傾向が強くなり、２モーラ以上の語に比べ、早い段階から衰退して至ったのではないかと考えられる。ただし、２モーラの語の中でも、/ai/連母音は、他の連母音に比べ衰退の速度が遅い。これについては、/ai/連母音が他の連母音に比べ、融合形が安定して認められることが背景にあると考えられる。/ai/連母音は日置地区に限らず、連母音の融合現象が盛んな地域でも他の連母音に比べ融合形の保持が非常に高いことがわかっている（内山 1996、

安藤 2013、尾崎 2013）。この点については、[a]と[i]の母音配列が影響しているからではないかと思われる。[a]は広母音であるのに対し、[i]は狭母音であり、[ai]は対象的な音が連続している。この対象的な音の連続を中和させようとすることで、[ja:] または[e:]で融合形として採用され、安定しやすいのではないだろうか。

また、音と意味の衝突という面から考えると、例えば、共通した融合形[ja:]を持つ/ai/と/ae/のうち、同じ子音を頭に置く[mai]と[mae]が融合すると、[m^{j}a:]で実現されることになってしまう。これでは、[mai]と[mae]との区別できなくなってしまい、同音衝突が生じることになる。さらに、2 モーラという短い拍だけでは、語の意味を表す手がかりが少なくなってしまい、意味伝達において困難が生じる。しかし 2 モーラ以上の場合、連母音の前後にある要素が語彙の意味的手がかりになりうる。同じ形態素の「前」を含む「お前」「前掛け」「前」において、2 モーラの「前」だけが融合しない[mae]で実現されるのに対し、[om^{j}a:]、[m^{j}a:kake]が許容され、使用される理由も、2 モーラ以上の語は音韻変化が起こっても意味伝達において支障が少ないことが要因になっていると考える。

5.2　品詞のタイプ

次に、調査項目の品詞のタイプから考察する。品詞と連母音融合の関係について、吉田（1992）は、融合形は形容詞よりもむしろ動詞で多いと述べている。内山（1993）では、名詞の融合率が低いことに加え、形容詞と動詞の融合率を見ると、若年層と高年層では傾向が異なり、若年層では形容詞の方が融合率が高いのに対し、高年層では形容詞よりも動詞のほうが融合率が高いことが明らかになっている。また。尾崎（2013）では、形容詞や形容詞型助動詞は融合率が高いのに対し、名詞、動詞、形容動詞、副詞、動詞型助動詞の融合率は低いことを明らかにしている。これらをまとめると、動詞、形容詞、名詞のカテゴリーにおいて、動詞と形容詞に若干の融合の程度は見られるものの、「形容詞≧動詞＞名詞」の順で融合形が表れやすいようである。

では、日置地区に見られる連母音融合と品詞の関係はどうであろうか。調査結果の形容詞、動詞、名詞に限定し、その融合率をまとめたものが、以下の表 9 である。

表 9　形容詞・動詞・名詞における融合率

	形容詞	動詞	名詞
/ai/連母音	49.4%	38.1%	41.5%
/ui/連母音	38.1%	23.8%	0%
/oi/連母音	39.2%	25.0%	0%
/ae/連母音	－	0%	22.4%

表 9 からわかる通り、日置地区における連母音融合は、いずれの連母音においても形容詞が融合しやすいことがわかる。/ai/、/ae/連母音では、動詞よりも名詞のほうが融合率は高かったことから、先行研究とは一致しない。井上（1984）は、動詞語幹、名詞といった不変化語や「書いた」や「咲いた」などの動詞活用形は形容詞などに比べ融合しにくいと

指摘する。本調査の動詞は、「炊いて」「脱いだ」など動詞活用形が多かったことを考えると、動詞、名詞という品詞性の問題というよりはむしろ、項目の活用の有無が影響した可能性もあり、単純に動詞のほうが名詞に比べ、融合が起こりやすいなどとは結論付けることはできない。

形容詞に多く連母音融合が確認されるという傾向は、先に指摘した通り日本の諸方言で認められている。なぜ形容詞に連母音融合が多く認められるのかという疑問について、尾崎（2013）は、「形容詞や形容詞型助動詞であることだけを示す活用語尾において融合が生じるのは、いろいろな語に共通する現象であること（尾崎 2013:11）」を可能性の一つに挙げている。形容詞「偉い」「古い」「面白い」や形容詞型助動詞「おいしくない」「見たい」といった語は、語末が/i/で終わるため連母音となりやすい。そのため、必然的に動詞や名詞に比べ/ai/、/ui/、/oi/の連母音が生じやすく、融合形が定着しやすく、意識に残りやすい。現代の標準語における[sami:]（寒い）や[kare:]（辛い）のようなぞんざいな発音（casual speech）も形容詞を中心に派生していることから、形容詞に見られる連母音の融合は、宮津市日置地区にのみの特徴ではなく、普遍的な傾向であると考えられる。

5.3　考察のまとめ

考察から指摘できる宮津市日置地区における連母音融合の特徴は、以下の（d）（e）のようにまとめることができる。

（d）2 モーラの項目で、連母音融合が限定的である背景は、連母音融合により、特殊モーラとなることで、語の安定性が低下することを避けるため、また同音衝突が生じた場合、3 モーラ、4 モーラのように意味を補う情報がないため、2 モーラの語で連母音融合が起こりにくいのだと考える。

（e）形容詞において連母音融合が多くみられるのは、形容詞の場合、語末が/i/で終わるため、必然的に/ai/、/ui/、/oi/の連母音が生じやすく、融合形が定着しやすいためである。

6.　まとめと今後の課題

本稿では、宮津市の連母音融合現象について行なった調査結果について報告した。本稿で報告した内容をまとめると次のようになる。

（A）連母音の融合現象は、宮津地区では認められず、日置地区のみに認められる現象である。宮津地区の意識調査から、連母音の融合形はすでに衰退したと考えられ、宮津地区と日置地区とでは大きく異なる。

（B）/ai/連母音は、基本的に口蓋化する[ja:]の融合形、/ui/連母音は[i:]となり、/oi/連母音は[e:]となり、/ae/連母音は、/ai/連母音と同様に[ja:] で実現される。

（C）2 モーラの語はほとんど融合しない。これは、2 モーラの語の安定性を保つためであると考えられる。

（D）連母音融合は形容詞に多く表れる傾向がある。これは、形容詞がその性質上/ai/、/ui/、/oi/の連母音を含む場合が多いからであると考えられる。

今回の調査では、宮津地区と日置地区とで全く異なる傾向が認められた。また、意識調査でも、融合形の回答は「昔の人のことば」という回答だけではなく、「橋北地域（宮津湾よりも北側）や丹後地域の人のことばだ」という回答も多くみられた。これらの結果から、奥村（1962）のとおり、宮津市内の北側と南側の地域とでは異なる方言的特徴を有していることがわかった。

今回の調査から、宮津市内に音韻的特徴の境界があることが確認されたが、融合形が使用される地域はどの範囲までかは具体的には示せていない。また、今回の調査は 70 代から 80 代のインフォーマントを対象にしたが、高年層であっても融合形の回答に大きなばらつきがみられ、まったく融合形を使用しないインフォーマントもいた。この点については、言語生活や言語意識などの面から考察するのが妥当な方法かもしれない。また、調査を行ったインフォーマントよりも下の年代では、どの程度連母音融合を保持しているのか、という点も考える必要があるだろう。諸方言の連母音融合は衰退しており、若年層ではほとんど使用しない、あるいは特定の語にのみ残っているというのが現状である（尾崎 2013）。本調査では、非常に限定的な地域、調査項目、インフォーマントを対象に調査を行ったが、宮津市における今後の方言の動態を明らかにするためには、さらに踏み込んだ調査が必要になるだろう。

【参考文献】

安藤智子（2013）「多治見方言における連母音の長母音化について」『富山大学人文学部紀要』58，pp.23-60.

糸井通浩（2015）「丹後弁と尾張弁（名古屋弁）の類似性」『丹後・東海地方のことばと文化：兄弟のようなことばを持つ両地方』pp.26-36.

井上史雄（1984）「埼玉県の方言」『講座方言学 5　関東地方の方言』pp.171-202，国書刊行会.

内山智美（1996）「熊本県下における連母音の融合状況」『日本文学研究』31，pp.15-24.

奥村三雄（1962）「京都府方言」井上史雄他編（1996）『日本列島方言叢書　近畿方言考 3　滋賀県・京都府』pp.75-120，ゆまに書房.

尾崎善光（2013）「岡山における連母音の融合状況 ： 多人数調査から見る」『清心語文』15, pp.70-59.

室山敏昭（1967）「京都府与謝郡伊根町方言の音声生活について」井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編（1996）『日本列島方言叢書　近畿方言考 3 滋賀県・京都府』再録 pp.143-169.

吉田健二（1992）「埼玉県東部方言の音韻の性格：母音の問題を中心に」『国文学研究』108, pp.64-54.

おだ　さちこ（大阪大学大学院生）
sachiko527@hotmail.co.jp